

奈良県 有識者講演会 令和元年9月10日
会場Ⅱ奈良公園バスターミナル・レクチャーホール

【講演者】

日本国際問題研究所理事長兼所長

前駐アメリカ合衆国特命全権大使 佐々江 賢一郎氏

フリーアナウンサー

八木 早希氏

奈良県知事

荒井 正吾

講演1 「激動する世界と日本」

▽対談者Ⅱ佐々江賢一郎氏、八木早希氏

世界が挑戦する三つの課題

八木 今回のテーマで佐々江さんをお迎えするというお話をうかがったのは今年6月初旬でした。当時に比べて国際情勢は悪化したという言い方をする方も大勢いらっしゃいますし、今は「激動する」という言葉がぴったりかと思えます。では、日本としてはどういった視点でこの激動する世界を見たらいいのか、その視点のヒントを佐々江さんからいただけたらと、そんな思いで講演会を開催させていただきました。まず、世界全体を見たとき、佐々江さんはどういう流れにあるという印象をお持ちですか。

佐々江 世界は難しくなりつつあると思います。少し前より難しくなったというお話でしたけど、日本周辺の問題、つまり韓国、北朝鮮、中国の問題で、アメリカと中国の対立とか、中国でいえば香港や台湾の問題とかいろいろありますが、何かこういう問題の先鋭

化が起きているのではないと思います。世界をどういうふうに見るかの切り口はいろいろありましようが、私は大きく分けて三つの大きな挑戦があると思います。

世界の警察官でなくなったアメリカ

佐々江 一つは、われわれ（日本）は戦争で負けて、サンフランシスコ条約締結で国際復帰しました。昭和26（1951）年ですね。それからアメリカと同盟国の関係に入って日米安保条約を結びました。世界でいろんな紛争があったけど、日本は幸福なことにこの間一度も戦争することなくやってきました。強大なアメリカは世界を指導し、民主主義や人権の問題などリベラル・オーダーの戦後の世界の秩序ができてきて、アメリカはその中心にいたわけです。ところが、トランプ大統領になって急に起きたとは思わないのですが、アメリカ一人では世界を背負いきれない、もはや世界の警察官じゃない、アメリカ自身は本当に必要なところ以外には軍隊を送りたくないんだと。それぞれの国が、みんな必要な範囲で自分を守るべきだという感じになってきたわけです。

アメリカは常時戦争をしていて、アフガニスタンであれイラク、シリアであれ、今でもどこかで戦闘に従事している。もう背負いきれないという感じはトランプ大統領が出てきて急に始まったことではありません。オバマ大統領のときからあり、トランプ大統領になって加速化したということがある。経済的な秩序では自由貿易体制ですが、トランプ大統領は自由ということをもう言わなくなりまして。気候変動の問題、二酸化炭素ガス削減を巡る世の中の良心的な削減努力に真っ向からチャレンジしたり、世界の人権の問題を前ほど言わなくなったりとか。アメリカは自分のことを第一に考えるようになってきたわけです。

アメリカを中心に世界はまだ回っているとは思いますが、その回り方が、アメリカがリードしていくという感じじゃなくて、オバマ

大統領のころから既に、アメリカは先に立ってリードするというよりは「背後からリードする」という考えが出てきています。ですから、各国がもう少し自立して自分の繁栄と安全を考えなくちゃいけなくなってきました。これが一つの大きな要素です。

自由主義は勝ったか？ 挑戦する中国

佐々江 世界大戦後からアメリカの主導で続いてきた自由民主主義体制を巡っては、冷戦が長く続いてきた中で90年代にソビエト連邦が崩壊しました。共産主義の体制が崩壊する過程で自由主義対共産主義の戦いは自由主義が勝ったんだと、アメリカの政治学者のフランシス・フクヤマさんが『歴史の終わり』という著書で書いていたりしました。もう体制のチャレンジは受けないんだと、アメリカの民主主義が勝ったんだということです。しかし、その後20〜30年ほどたつてくると、果たしてそうなのかとなってきました。ソ連はなくなくなったけど依然として専制主義的な考え方だし、中国ではむしろ一党独裁の共産主義体制を強化する方向にあります。中国が開放化してくるにつれ、われわれの体制に近いような国になっていくという期待もありましたが、どうもそういうふうにならない。現状は、元のような、ある種の復古主義もあるし、中国はよりチャレンジャーとして登場してきているのではないか。この状況は、単に経済的な競争とか軍事的な面を超えて、どういうふうな国のあり方がベストなのかという問題も関係してきています。

対立の増加で世界は戦国時代に

佐々江 依然として難しいことの三つめは各地で対立がなくならないこと。北朝鮮やシリア、そこにイランを入れるかどうかは議論があると思いますが、世界の至る所で対立しているという問題です。紛争の管理の問題で、冷戦時代に米ソが対立してその中できっちり

と二分していた方が安定的だったというようにも見えます。そのあたり、多極的な難しい時代に入ってきましたね。合従連衡的などうか、戦国時代というか、秩序を昔のように予想しにくい世界の情勢になってきたということですね。

北朝鮮、中国などすべて難題

八木 その中で、いま一番懸念していること、気にかけているのはどの問題ですか。

佐々江 すべてですね。どれがより大変だということではありません。日本の安全に直接影響をもたらすという点では、やはり北朝鮮の核ミサイル開発は、交渉によってなくなっていけない限り、日本は常に脅威にさらされることになります。アメリカとの同盟によってこれを抑止するという体制になっているわけですけど、最近のアメリカの分かりにくさというのものもあるし……。もちろん日米同盟は続いていくとは思いますが、北朝鮮がどうなっていくかは、国全体の安全を脅かすという意味で引き続き大きな問題です。

二番目に、中国に関する中長期的な問題があります。われわれは戦後、民主主義国家としてアメリカと同盟国でやってきたわけですが、中国が改革・開放で国際的な貿易体制に入ってきたときには、中国はいずれ経済的な自由化、政治的な自由化につながるという期待もありました。政治的な民主化、すぐではなくてもだんだんに表現の自由、集会の自由、言論の自由など、まだ十分ではありませんが、そういうことが改善していくんじゃないかと期待もありました。でも現時点で見る限りはそういう方向に行ってなくて、むしろ厳しくなっている面がある。中国の軍事拡張。南シナ海や東シナ海もですが、急速な拡張をしており、これは将来どうなるのか、どこまで続いていくのかという問題ですね。隣国だから仲良くやっていかなければいけないけど、われわれは心配しなくてもいいのか。日本も相応する形で軍備・軍事力を増強しなくていいのか。これは直接日

本に關係する大きな問題です。

米中の覇権争いで日本はどうなる

八木 日本動きとしては、中国とアメリカとの貿易摩擦も含めた覇権争いを見守っているような感じですが、いつまで見守る立場でいるのでしょうか。そのうち何らかの形で巻き込まれるという実感が出てくるのか、どういったところにアメリカと中国の覇権争いは収まっていくのか、どこに向かっていくのかということですが。

佐々江 この問題に全て答えられる人はあまりいないでしょう。いろんな要素が関係します。米中両国が衝突する、戦争になるという人もいます。大国であるアメリカに対して中国がチャレンジャーとして出てきた。中国が自制するか、あるいはアメリカの方から良い関係へもっていかないといずれ衝突する、戦争が起きるといふ心配ですね。保守的な考え方をすれば、そういう中国にならないようにアメリカは対抗していかねばならない、中国の力を削ぐことがわれわれの利益だという考え方になります。そうすると日本は影響を受ける。日本はアメリカと同盟国ですが、アメリカと中国のどちらを取るのかという立場になるべく置かれたくない。中国は隣国として重要ですし、できればそういう立場に置かれるのは避けたい。しかし、いざ本場に抜き差しならないようになってきたらどうするのか。昔の関ヶ原の戦いみたいに近くの山に登ってどちらが勝つのか見定めをつけるような芸当はできません。日本はアメリカの同盟国なので、アメリカの肩代わりは中国はできないという考え方に立てばアメリカ側についてちやうと。そうなると中国との間に大変な緊張も出て来ます。

日本は日中両国へ働きかける努力を

佐々江 そういう可能性もあることを念頭に置きながら、何とか

して米中間の問題が本当の衝突に至らないよう、お互いに対して日本は働きかける努力が必要だと思います。率直に言って、日本が間に立って具体的な問題について仲介するというのはなかなか難しい。話し合いによる解決を望むという立場に基づいて両国に促してもすぐに解決、とはなりません。しかしまた、アメリカと中国が仲良くなつて日本が袖にされるようなことも望んでいません。戦前のように米国と中国が非常に良い関係で、一方で日米関係は最悪で、ということにならないようにする必要があります。言うはたやすく行うはなかなか難しいことですが、ほどほどに米中両国がお互いに競争はしてもいいけれど、それが戦いに至らないようにする日本の外交努力が必要です。日本はアジアの平和を願う立場から、アメリカが中国に要求していること、とりわけ経済問題では中国のいろいろな問題が解決されることを望んでいます。しかし一方で、アメリカがどんどん関税を上げて対抗的な報復措置を取り続けていけば、中国もメンツがあるので怒り、対抗措置の応酬となる、これはよろしくない。日本は「双方に言い分はあるだろうけど適当な所で収めてくれよ」と外交するのが筋だと思います。

増える強硬派にどう対処するか

八木 日本は外に向けてあまりものを言わないという印象が日本国民にもあると思います。佐々江さんは、外交の最先端ですっと活躍され、紳士的な交渉、平和的な交渉をずっとされてこられた当事者ですが、世間では強硬派が増えてトランプ大統領的な物言いが増えてきています。こうした世の中をどう見ておられますか。

佐々江 表向きというか公の場所で言うことと、例えば話し合い、政府の交渉の場で言うことは多少分ける必要がありますね。夫婦のように家で「おい、お前」とやってる話と外に向かってする話は違います。言いたい放題言っているとお互いの国民感情をおおることになります。指導的立場にあるというか、リードする者は、言葉につい

て正しく使うべきだと思います。そういう面で言うと、オバマ大統領は演説も立派。自分の子どもに聞かせられるし、読ませられる。見本のような演説をするような人でした。一方、トランプ大統領はちよつと、子どもにあまり聞いてほしくないなというものもあるし、あまりにもストレートに言って感情をあおっている面もあると思う。交渉の場では激しくやり合っても、いったん（ボクシングの）リングの外に出れば握手しておしまいにすべきでしょう。

安倍総理とトランプ大統領は非常に良い関係であるといわれます。世上で言う「馬が合う」ということでしょうか、たくさん会って話をしています。でも相手に苦言を呈するとか、条件提示するとかの場合、マスコミを通じてではなく直接行うことが重要。ドイツのメルケル首相はトランプ大統領批判を直接公けにやっています。みんなはその通りだと言うかもしれませんが、トランプ大統領とは話をしても通じないという態度ですね。彼に影響を与え、こうしてもらいたい、ああしてもらいたいという話に説得力があるかどうか、世間に対する説得力じゃなく本人に対する説得力はどうなのかということです。トランプ大統領のような方とは楽屋裏で難しい話をしても、公けの場所では同盟国アメリカの大統領に対して節度を持って言うようにしておいた方が、実際上はインパクトがあると思うのですけどね。

アメリカを二分する移民問題

八木 駐米大使時代を振り返って印象的だったことは。

佐々江 オバマ大統領は繊細で論理的な人で、大勢の人たちに向かつて演説するのが上手な人でした。またトランプ大統領はアジテーションというか、みんなを興奮させるのがお得意だと思います。個人的な場所で話をすると、トランプ大統領は気安く、とつつきやすい。しゃちこばって袴（かみしも）着て話をしないので話はしやすい。非常に直感的、本能的な感じで、バラエティーがあります。

公けのスピーチでは相手を威嚇したりすることもありますが、二人だけとか少数人数だと楽しい雰囲気ですね。オバマ大統領は謹厳実直、整理された話しをされる。まさに合衆国憲法を代表する大統領という感じ。どちらが良いか悪いかではありません。トランプ大統領は国の周りに壁を立てているが、オバマ大統領は自分の、個人の周りに見えない壁を立てていたという人もいます。オバマ大統領が去るときに、アメリカのニュースの人たちは「われわれは二度とオバマ大統領のようなスピーチを聞くことはできない」と非常に悲しんでいました。CNNはトランプ大統領を毎日批判しています。他方で、トランプ大統領に対してはアメリカで熱狂的な支持をしている中西部の人たちが相当います。この人たちは、大統領が何と言っているかもさることながら、大統領が目指している方向を支持しています。たとえば移民をもうこれ以上アメリカは入れられないと。アメリカ人になるために国内に600万人が列をなし、1000万人の不法移民の人がいる。

日本に100万人、500万人、1000万人の外国の人が列をなして不法移民に来るといったら、国が成り立っていくか、想像してみれば分かると思います。長い間アメリカは移民に寛容な国で、世界の圧政から逃れてきた人たちが成り立っているのです、それを大切にしていとは思いますが、アメリカにとってそんなことはもう十分過ぎるほどなんじゃないのか、もう少し自分たちのことを考えようという考え方がアメリカ人の半分くらい占めています。そういうことがトランプ大統領の支持につながっていると思います。

まだ見通せない大統領選挙の行方

八木 もう半分を考えると、移民出身、もしくは移民の子もたちが、大成して芸能界で活躍してハリウッドの大舞台で活躍しています。そんな人たちがメッセージを発信して多様性に対するプライドを持っているということもあります。

佐々江　そうですね。今のアメリカの分断は、いままでにない状況でしょう。西部と東部はどちらかという移民に寛容、リベラルなだけでなく中西部・南部は保守的な立場。アメリカが全く別の世界で暮らしている。生活様式も考え方も違うということですが、以前は交じり合っただけで多少妥協してということもあつたけど、今は真つ向から対立するというように先鋭化しています。トランプ大統領の支持率は常に50%以上になりません。アメリカの大統領では非常にユニークなことで、固定的な支持はあるのだけれども、固定的な反発もある。アメリカが果たしてどっちの方向へ行くのか、現時点ではよく分かりません。トランプ大統領が勝つという人もいますし、負けるという人もいます。トランプ大統領の再選は、可能性としてはあると思います。

それを占う要素は、今の段階ではいくつもあります。一つはアメリカ経済がどうなるのか。来年の秋の段階でアメリカ経済がどうなっているか。まだ景気は今のところ拡大中で、戦後最も長い景気が続いています。いつかはスローダウンすると言われながら続いている。そろそろ米中両国の貿易摩擦の効果も出てくるかもしれないし、金利を上げようと調整しようとするともた下げる、下げるでずっとやっていくと赤字が膨張する懸念もあります。所得の格差も激しくなり、そういう中でアメリカの景気の底が割れてくると、いままでの不満、リッチ・アンド・プアの問題が出てきます。いまのやり方に不満を持つ民主党左派の人たちが力を得る可能性もあるのではないか。アメリカでは、社会主義的な大統領はあり得ないという人が多いけど、例えばアメリカでは基本的には個人が保険を会社から買います。日本のように政府や企業が保証して保険を買う、料金を払うというのは社会主義的な主張だとなります。でも学生は苦しんでいて、大学を卒業するのにたくさんのお金を借りて、それを返すのに20年もかかるとかですね。これでいいのか、もう少し学校の教育費をみんな安くするように政府が補助しようと。こういう主張をすると、社会主義だという議論ですから、まあ難しいと思うのが常

識的ですね。しかし常識は間違うこともある。選挙戦術的な話ですけど、トランプ大統領は接戦州で先の選挙に勝ちましたが、中西部あたりのぎりぎりです。勝った州を巡って「今度は勝てるのか」という話があります。いままで共和党の地盤だったところが、だんだん民主党が優勢になっていっているという人たちもいるし、トランプの負けというふうに断言する人たちもいます。特に民主党系の人たちは今度は絶対に勝つという構えで、私はそういうこともあり得ると思います。

前回はトランプ大統領を支持したけど今回は止めておきますという無党派の人たちもいます。あるいは民主党の候補について、トランプ大統領と舌戦をして勝てるか、3年前の選挙ではこてんぱんにやられたとして、場外乱闘みたいな舌戦に勝てるかという人もいます。いろんな要素があり、私がいま聞かれれば、分からないと答えます。前にトランプ大統領が選ばれたときも、アメリカの専門家のほとんどはトランプ大統領は勝てないと言っていましたし、私がワシントンにいたときも、90%ぐらいの人がトランプ大統領はあり得ないと言っていた。専門家の見方は正しい場合もあるけど、間違う場合もあります。少し前にトランプ大統領に少し陰りが出てきて、特に接戦州でどうなるのかなと思わせる悪い数字も出てきています。まだよく分かりませんが、ちょっと前ほど飛ぶ鳥を落とす勢いはない感じだなというぐらいですね。

景気についてはなんとも言えません。世界経済全体が来年以降に下降し、スローダウンしていくとアメリカもその影響を受けますし、米中関係が収まっていけないとこれを加速し得る。いくつかの要素がどうなるかで左右されます。米中の摩擦が絶対に解決しないかといえ、私はどちらかというところと軍事とかハイテクの世界では当面解決しないと思いますけど、米中間で暫定的な、停戦的な合意ができないかといったら、そこまで否定する必要はないのではないかとも思う。そういうことが実際にできるのかどうかなどいろんな要素があり、今の段階で、来年の秋にアメリカ経済はこんなになっている

とか、景気がこれ程下がっているとか、選挙では民主党ないし共和党が優勢で決まっているとか、あるいは民主党から出る候補者がトランプ大統領を打ち負かせるほど国民に人気が出るのかとか、どれも見てみないと分かりません。そういう意味で、いずれを言っても勝手な予想だと言ってるわけです。

日米関係の基本事項は超党派で一致を

八木 政府のトップが替わると外交当局は混乱するのでしょうか。佐々江さんは外務審議官として福田、麻生、鳩山各内閣、事務次官として菅、野田各内閣という短期的な政権が連続していく中で勤められました。現場というか外交官サイドとしては混乱するものですか。来年、トランプさんが大統領にならないとなったときには、一から対応を作り直してとかいう作業になるのですか。

佐々江 そもそも一国のリーダーが短期間に次々と替わるというのは望ましくくないですね。外交面からみると政治が安定していないと思うし、外国との関係をつくって政権が難しい問題を話し合っても、すぐ替わってしまうとうまくない。それなりの期間に安定した政治がやれるということは、外交にとっては必須の良い条件なわけです。お役所の人はやってきた基本政策を維持しようとするもので、短期間で替わっても大丈夫だという気概と自信をもってやってると思うし、やってきたと思います。

難しい問題、基本に関わるような問題については、リーダーがどちらを向いているのかは非常に重要なことです。そして日本が内政上しっかりしていないとなると、ロシアとか中国のような国もそうだが、やはり攻勢に出てくるということは過去にもありました。北方領土の問題にしる、尖閣諸島の問題にしる、日本が安定しているということは重要なことです。その延長上でロシアや中国との関係でいえば、日本とアメリカとの安全保障体制は万全だと見られないと、隙があるというふうになるので、安保体制を維持していく努力

は政権が替わってもあるわけです。いまトランプ大統領と良い関係を持って日米関係を強くすることは重要だと思えます。

他方、アメリカは、ロシア、中国と違って、民主主義体制の国です。ですから大統領が替わっても日米関係の基本は変わらないわけです。アメリカの中でも考え方の違う人がいずれは現れてくる可能性があります。りますが、トランプ大統領が来年の選挙に勝てばさらに4年の任期となるわけです。それを超えて任期を続けるとなれば憲法を改正するかというふうになります。普通はない。一方で中国とかロシアは任期があつてないような類いの体制安定が見られる。それで、向こうの方が中長期的に考えやすいと見られていますね。どちらかといえ、われわれの方が短期的にその場で何とかしなくちゃという方向になるので、アメリカについても当面の政治の趨勢を超えた長期展望で日米関係も考えておく必要があります。日米関係は、アメリカの民主党であれ共和党であれ、リベラルであれ保守であれ、超党派で日米関係は重要であると一致していなければなりません。

アメリカに5、6年いて感じたことなんですけど、人によって多少差はあるけどアメリカの人は日本の関係は重要だと言います。アメリカと中国との関係と日米関係は比較できないんだということについては非常に力強い支持があり、その辺は日本は自信をもっているんだと思います。あれっ、ていうようなことも時にはありますけどね。日米関係で重要なことは、トランプ大統領に限つていうと、今のアメリカの貿易上の二国間のインバランスへの過度の重視が正しいかどうか。われわれは必ずしも正しくはないと思つているけど、そういうわれわれの主張を原則問題として維持していくことは重要です。この間、日米間の物品貿易交渉で大枠合意したので、大局的には収まっていくでしょう。早めに決着したのは非常に良いことで、米中間では対立の方向にありますけど、日米間で米中と同じような対立状況に至らず、これは良かったと思えます。もう一つ、安全保障・防衛上の問題で、アメリカ側から率直に言えば、日本はもう少し防衛努力に取り組み、自分の問題として考えた方がいいんじゃない

いのかという感じがあるでしょう。日本がいままでやってきた努力との比較でいえば、国全体の経済との関係からみれば日本はそれほど防衛面で大きな資源を注いでいると必ずしも言えない面もあります。今後、経済問題の後に控える防衛・安全保障を巡る分担の問題について、日米双方が話し合いをしていくことになるだろうと思います。

外交交渉の結果・成果は明言しない

八木 外交問題で、戦闘機にしてもトウモロコシにしても基地負担にしても、日本は不利な形で決着したんじゃないかという声が上がったら、どう答えられますか。

佐々江 経済・貿易で、私が現職なら決して得したとか言いません。こっちが得したんだと言えば、相手は「おれたちはうまくやらなかったのか」ということになって、もう一度やり直せという議論になるので、決してそういうことは言わない。内心うまくいったなと思ったら「ちよつと不足だけど、まあまあじゃないですか」ぐらいの感じが望ましいですね。日中間の東シナ海の資源開発の問題で、2008年、9年に合意したんですね。その後で「日本に非常に有利な、うまい交渉で決着した」ということがどつと報道された。それで何が起きたかという、中国側では、日本に有利な決着なのかと受け止められ、それもあって、中国はこれを実施しなかった。もちろん、基本的には政治関係が大きな影響を及ぼす訳ですね。今日までも実施していません。合意を具体化する交渉しようといくら言っても駄目なんです。

日米間では、ご承知のTPP交渉で、前のオバマ政権の時代に地域的な合意交渉がまとまり、われわれとしてはベストだと思っていました。ところが、トランプ大統領がこれに入らないと言い出し、二国間でしかやらないと。そこで、日本は地域的な自由貿易体制を維持・強化するとしてTPPを推進する、同時にアメリカも同盟国

なのでこれをどうかしないと言うことで、二国間の交渉も進めた。両方の足で踏ん張って決着したということは非常に大きな外交的意味合いがあると思います。中身の問題について言えば、特に日本が心配だったのは農業の問題。農業でアメリカに屈するべきじゃないという点ですけど、安倍総理がトランプ大統領との間でかなり早い段階で話をされ、TPP交渉で日本がアメリカと約束したこと、牛肉にしる豚肉にしる、基本的にはそれ以上はやらないんだと、そういうふうな話をしてですね、まあいいですよということになった。トランプ大統領は言っておいてすぐ立場を変えろという心配がありますけど、妥当な範疇に収まってきたので成功だったと思います。

不満があるとすれば、自動車についてTPP交渉では20年、30年かけてアメリカの関税を下げていくということになったわけですけど、今回はそういうことがされていない。それをどう受け止めるかですけど、アメリカはご承知の通り、むしろ自動車市場を保護するために自動車の関税を上げるとというのが基本的出发点ですね。下げるんじゃない、メキシコとカナダと交渉して上げるぞということをやって結局、メキシコとカナダは譲歩してある一定の低関税枠内で輸出を確保するというようにした。中国に対してやっているような、一方的に関税を上げるよりは、現状維持ならましではないかというふうにも言えます。期待値をどこに置くかということですけど、いやいやそれはないだろう、TPPではアメリカは下げるとは言わなかったのにこれはおかしいじゃないかということも言えると思います。どちらの方向から見るかということですが、自動車の問題というのは依然として継続して話し合うという位置づけなので、これが今後どうなるのかということですね。

【質疑応答から】

香港と中国の確執は超難題

質問者 6月に香港人権法がアメリカ政府に超党派で提出され、9月8日には香港で大きなデモがあつて記憶に残ります。香港で起つていゝことはマカオ、台湾、日本にどんどん近づいてきているという懸念があるのですが、佐々江さんはどういうふうにお考えになつていらつしやいますか。また来年の米大統領選の中間選挙ですが、米中間で武力戦争や経済戦争になるのか、その辺のところをうかがえればと思います。

佐々江 イギリスが中国と条約を結んで香港を中国に返したとき（1997年）の条件は一国二制度の維持です。香港は中国のものなんだという自覚がずっと中国にはあるわけですけど、香港の制度を維持することにしました。中国はそれまで、香港の自由とか政治的な体制・システムとは違う、これを評価しないという前提でやってきたので、中国の政治的な方向について樂觀できない感じもありました。天安門事件を経て、中国には政治的自由を巡る非常に難しく、大きな問題がなおあるわけです。普通選挙の実現は香港の学生たちの要求の一つなんですけど、日本では1925年に普通選挙法ができ、いまこの話を香港でやっている。私たちは、ああそういうことなんだと思うわけです。

香港はある面でも出島です。政治的に先進的な面でも外に出された部分は、いづれ中国に影響を及ぼします。中国の本土全体の政治的な民主化が進んでいくことによつて一国二制度が保たれていけばいいなと思つていた人もいます。心配している人もいます。要するに中国の共産党体制、一党独裁体制というのは変わらない、香港の体制が侵食されていき、中国全体の政治的な香港化はないと。中国からすれば、香港は悪い影響を与える。西側の制度、普通民主

主義は中国になじまない制度であると、少なくとも今の中国指導層はとんでもない影響を中国自身に与えると考えています。中国の香港に対する圧力、香港の代表を選ぶ際のやり方などから、香港の人たちは徐々に中国化を感じていたと思います。きっかけは容疑者引き渡し条例（逃亡犯条例）で、もともと香港の人が台湾に行つて罪を犯して出てきたのをどうするかという話ですが、返還のとき香港は台湾、マカオ、中国本土については対象にしなかった。ほかの国とは対象にしました。香港で政治的発言をした場合、政治犯にして、普通の国なら自由にしゃべれることが中国では犯罪になる、国家に対する政治犯だということに引つ張られていく。それはたまたまないとかですね。香港の経済界の人たちにはこれに賛成したり、心配したりする人たちもいたと思います。中国との関係が深まるということではないのですけど、中国では賄賂が非常に大きな問題になっているが、そういうところで引つ張られるんじゃないかとか。いろんな人が心配している。今回はこれがシンボルになってしまったので、ある面で中国政府も困ったなどと、適当なところで収めてもらいたいと思っているのではないでしょうか。

いくつかの要求のうち、普通選挙制度の導入は最も難しいと思いますが、普通選挙制度を正面に掲げて戦えばクラッシュする可能性もあります。暴力的な軍の介入、天安門事件のようなことも場合によつてはあり得ます。中国政府もそこに行くまでに何とかして決着をつけたいし、穏健な人々と急進派を分離したいとかいろいろ考えていると思います。当面、何かで収まったとしても、中国政府は香港の政治システムを中国のシステムに何とかして合わせたいという圧力を働かせるでしょう。だから引き続き何度でも起きうる話です。

何が何でも戦争、ではない

佐々江 もう一つのご質問は、トランプ大統領が国民の関心をそらすために対外的な、冒険的なことやるんじゃないかということ

すね。政治史とか国際関係史でよく出てくる話ですが、果たしてトランプ大統領がそうなのかどうか。私は、慎重なのではと見ています。レトリックというか、言ってることは非常に激しいけど、戦争をあえてやるように考えているのかな、ということですよ。例えば北朝鮮を威嚇して交渉になったわけですが、そのときでも常にディール（取引）ということを強調しています。同じようなことはイランに関しても、核開発に関する合意があるのにこれをやめて、お前は悪いやつだからもうちょっと圧力をかけるとかいう一方で、これを聞いてくれたら同時に話もするよって、何が何でも武力で戦争するよということを追求しているよには見えません。

中国との関係でも、非常に強い態度で出ていると思うけど、正面から軍事的なことをアメリカ側から仕掛けるかといえば、より慎重に考えているのではないか。もちろん中国が仕掛ければ反応することとはあるでしょう。台湾との関係において、台湾がより独立志向的な傾向を強めてアメリカとの軍事協力を含めてさらに関係が強まっていくようなことに中国が危機感を覚え、中国が武力で問題解決しなくちゃというようなことになった場合、アメリカは約束で法律上、台湾を守るとなっているわけですから、アメリカと戦争が起きるということは、中国にとってもなかなか大変なことですよ。同様にアメリカにとっても大変ですよ。米中で戦争が全く起きないと言うつもりはありませんが、トランプ大統領の印象とか、言ってることからすれば、何が何でも戦争に突き進んで場外乱闘でやるんだということではないんじゃないかなと思います。

講演2 「奈良から東アジアを考える」

▽対談者 佐々江賢一郎氏、荒井 正吾

▽司会者 八木早希氏

聖徳太子や藤原不比等が活躍した時代

八木 奈良には独特の個性があります。8世紀に日本で初めての首都ができたところで、日本が国家として初めての歩みを進めた場所として、唯一無比の個性があるということです。まず知事から東アジアと日本、当時の地域の関係をお話しいただけますか。

荒井 古代の国際関係の中で国をどう立てるか、守るかで活動された方々がおられました。大和という国をどう立てようかということに格闘したのは聖徳太子とか中大兄皇子、天武天皇、藤原不比等のような人たちだと思います。藤原不比等は亡くなって来年で1300年という節目で、このあたり（平城京）に住んでいた人です。

八木 正倉院展などで世界遺産に登録されているようなものを拝見すると国際的な雰囲気が出てきて、日本独特の文化の始まりみたいなものを感じます。当時の日本と東アジアはどのような関係だったのでしょうか。

荒井 日本独特の文化というのは日本人が自負するところです。例えば仏教は外国のもので、仏教を受け入れて日本をつくったというときに、それが独特な文化かどうかという少しひっかかる場所があります。東大寺の大仏殿や平城京も全くのオリジナルではないということは分かっていますし、受け入れたものを持ってきて日本という国の礎にしたことは確かです。

八木 独特って思われがちなもの、つまり単体で、自分一人でできたものっていうのは世の中に少なく、何かの影響を受けながらできたということですね。

荒井 渡来ものをうまく使って、日本の文化を創ったのが独創的だったのですね。日本は大陸国じゃなくて島国ですので、それなり

の独立性を保つことに藤原不比等や聖徳太子が苦心されたのだと思います。佐々江さんが駐米大使としてワシントンで苦心されたことと重なります。日本という国の存在をそんなに大きく見せる必要もないと思いますけど、昔の大帝国が近隣に存在した時代に日本という島国の独立性をどう維持するかについては、内政もすっかりしなければいけないし、外国との付き合いもよく考えなければいけないということだったと思います。奈良時代に先人達のご苦労されたことを思い起こすことは、これからも役に立つのではと思います。

日本の優れた応用力の原点は奈良

八木 佐々江さんは現代の日本を背負ってこられましたけど、古代の飛鳥、奈良時代に思いをはせることもありますか。

佐々江 アメリカの歴史というのは2000〜3000年ぐらいじゃないですか。これに対して2000年とかいう、そういう長い時代をインドとか中国などから、最後には朝鮮半島から渡来してきたものが日本にありますね。日本のすごさというのは、それを受容して自分のものにして、さらに日本的に変化させる能力だと思います。仏教もそうでしたけど漢字もそうですね。漢字が入ってきて平仮名をつくった。今日の日本のあり方も、明治時代に日本に取り入れた西洋の産業技術、社会制度、維新政府など。大戦後はアメリカ由来の制度も多い。そういう意味で、昔の奈良でやっていたことは脈々と今の日本に受け継がれてきていると思います。うまくいったときと、うまくいかなかったときはありますが。

今日のチャレンジというなら、例えばハイテクは世界でしのぎを削っている。コンピュータはいまや量子コンピュータで、計算スピードが今までのコンピュータとは全然違い、世界の様相があつという間に変わります。そういうものに対して、日本は最初は多少遅れていても、応用してやっていく技術については優れている。「5G」導入で多少遅れているとかいわれるけど、それをどういう

ふうにするのかということについては、日本は非常に大きな技術・才能があると思います。その点については、これからの競争で日本は力を発揮するのではないですか。楽観論かもしれませんが。その原点は奈良だと思います。

日本精神の基層をどこに求めるか

荒井 外国文化の受け入れ方が独創的ですね。明治時代に福沢諭吉が言われた言葉に「和魂洋才」があります。今のスーパーコンピュータもかつての瓦や鉄器も技術の受け入れですが、その時到来した精神の部分はどのように受け入れたのでしょうか。受け入れたのは技術だけか、精神もか。仏教を受け入れたとき、仏教の仕組みや仏像とかは受け入れて残ったけれども、その時に受け入れたものの正体は分からなかったけれど、長年経って日本人の血となり肉となつていのように思います。

この近くに興福寺があります。玄奘三蔵の「唯識（大乘仏教の思想の一つ）」や般若心経が伝わったところです。中国に本元の経典などがあまり残っていないのは不思議なことですよ。もとの考えがその国にはなくなつて、伝わった先の奈良に残った。日本に残つた。

福沢諭吉が言った和魂洋才で、和魂とは何なのか、日本の独特な精神性というのは何なのか、という問いがいつも私の頭の中に出ってきます。日本人らしく振る舞おう、日本人らしく受け入れよう、外国の技術を受け入れても日本人としての気持ちを大事にするのは良いことですが、そんな気持ちとは何なのかは考えれば難しいことでもあります。日本のナショナルリズムとは、日本のアイデンティティとは何なのかということになるのかもしれませんが。日本のアイデンティティの基を奈良時代に捜すとすれば、それは天皇制かなと思います。天皇制を創ったというのが日本人の一番のアイデンティティの基ではないかと思えます。仏教も日本人の心に深く入って

いますが、外来の仏教が日本化したものという見方もできます。

八木 過日、橿原神宮に行かせていただきましたが、天皇制が始まった場所として紹介されています。奈良が日本の文化を共有しているということでしょうか。

大事なものを残すという奈良の役割

八木 東アジアの中の日本ということを考えてときに、いま奈良が担える役割というのはどういうふうに考えておられますか。

荒井 いまの国際社会の中で日本が、奈良が果たせる役割とは何か、ということですね。私がよく言うのは、文化でも何でも、日本に持つてくると1000年残りますよって。だから大事な書類とかは奈良が預かりますよ、1000年残しますからって。先ほど触れましたけど、玄奘三蔵ゆかりのものは中国にほとんどない、唯識の仏典も奈良にしかないと聞いています。

八木 それは、いいセールスポイントじゃないですか。

国同士はけんかしても地方は仲良く

八木 知事は東アジアでの対話を促進するためにいろいろ活動しておられ、その中の一つが「東アジア地方政府会合」ですね。県が中心となつて今年で開催10回目を迎えるということですが、具体的にはどういうことを。

荒井 佐々江さんのお話に韓国のことも出てきましたけど、国同士はお互いの政権維持のために今もよく口げんかをしますよね。そうすると国民の気持ちもささくれ立ってきます。そんなときには東京とソウルのけんかかというのをあまり気にしないで、奈良と百済で付き合いましょうよと言いたい。中央政府だけで対決するだけじゃなくて。地方政府独自のテーマもあるわけで、現在よく論議している東アジアのテーマは高齢化とか観光振興、地域振興などです。東ア

ジアも首都が中心地として発展している国が多くて、ソウル、北京、東京、マニラ、ジャカルタなどもそうですね。でも、地方でも発展した方が、一極化しない方が、国内のバランスはいいだろうとみんな思っている。だから地方の発展をどうするかというのは大事なテーマになるのです。共通する課題があるのだから集まって議論しようということですよ。

大昔に日本のお坊さんが中国か韓国に留学して大事にしていたのだから、感謝の気持ちの何万分の一かでも返させていただければという思いで始めました。参加していただいている地方政府は70ほど。中国と日本の仲が悪い時期もあったけど、いまはけっこう来ていただいています。次回の会合は11月に奈良で開催します。地方政府同士は国間の対立をあまり気にしないお付き合いができるのではないかと、こういうことは続けられたらいいなと思っています。

八木 韓国・忠清南道にしても歴史的な価値のあるものを守ってきている、同じ背景になっているという共通点もあるんですよ。
荒井 忠清南道はかつて百済ですけど、向こうの人は、百済は値打ちものだから、百済のものがないというのを「くだらないと言っている」とおっしゃいます。百済観音って奈良にしかないんですが、白鳳の仏さんは百済の影響が強く、芸術性の高いものが韓半島にあったことがよく分かります。

国を越えた個人の交流で際立つ奈良

八木 国にはいろんな側面があり、政治的な印象だけでひとくくりにしてネガティブな印象をもつと、対話の糸口も見つけられません。こういう役割を担う地方があるというのは励みになるのでは。

荒井 文書や仏様、石だとかは1000年も残るものもあるが、一番大事な人は人。大昔に韓半島から優秀な人が来て、日本列島に散らばって、日本民族が優秀になるきっかけになったと思います。平安時代初期に編さんされた「新撰姓氏録」という古代氏族の名簿

がありますけど、その3割から4割が外国人で、レベルの高い人が外国から来ていたことが分かります。高松塚古墳の壁画に星座があるんですけど、その星座の北斗七星のあるところで緯度が分かる。北朝鮮・平壤の近くの緯度なので、奈良に平壤の人が来ていたか、平壤の図を持ってきた人が来て高松塚古墳に描いたのか。高松塚古墳に埋められた人の正体はまだ分かっていません。

八木 当時のグローバル感、外のものに関心をもってそれを積極的に吸収しようという姿勢は今と同じでしょうね。

佐々江 国際交流にはナショナルリズムの感情と個人の活動が影響を与えます。政治がある状況にあっても、人々の交流で個人と個人が付き合った歴史は存在する。政治がある状況になったから個人が急に変わるといふことは基本的にはない。政治が急に変わったから個人の関係が疎遠になるっていうのはおかしな話で、関係なくやつたらいいと思います。個人の関係を政治にかかわらず維持し発展できるといふのが、開放的な民主主義のいいところなのです。われわれの方から閉ざすのはよくない、大いに続けるのがいい。韓国では、政治がある種のムードになると皆一斉に自粛するとかかなりがちだけど、そうじゃないんだと。政治、外交の問題はありますけど、みんなが政治や外交やってるわけではありません。個人の交流、人間と人間としての良い交流の拡大に関しては、とりわけ韓国や中国についても、奈良は非常に良い地だと思います。

ペルシャ人が飛鳥に来ていた？

荒井 トランプ大統領はドイツ系の人だと聞きましたが、そうすると先祖は（広義の）アリア人。アリア系語族のトップに位置するのはペルシャ語です。中央アジアから西の方に流れてゲルマンになったという人がいます。その当時から注目されたのがゾロアスター、拝火教の教祖です。ドイツ語の名前だとツアラトウストラ。その拝火教の影響は東大寺・二月堂の「お水取り」の松明にもあ

るとされています。松本清張の小説『火の路』に書かれています。小説では、拝火教が公教だった当時のササン朝ペルシャ（3〜7世紀）の末裔が飛鳥に来ていた可能性があるとしています。日本書紀に、「吐火羅国（トカラ国）」の男女が日向に流れ着いて、その中の一人「乾豆波斯達阿（けんずはしたちあ）」という人が妻子を日本に置いて帰っていったという記述があります。

歴史を特定の価値観で決めつけない

荒井 ハーバート・フーバーというアメリカの第31代大統領がいました。フーバーが書いた『裏切られた自由』という本がありますが、その中で太平洋戦争が起きたのはフランクリン・ルーズベルト（第32代米大統領）が日本に対して挑発を重ねた結果だ、と自分で調べて書いています。死んでも発表するなど言っていたそうですが、亡くなって何十年もたって遺族が発表されました。スターリン（元ソ連最高指導者）は、ヒトラーと戦わなければならぬのでアメリカと日本を戦争させたかった、日本の戦力を南に向けてアメリカと戦わせたかった。日本の陸軍は当初、北方防御しか考えていなかったのに南進論を展開した。日本の戦死者300万人の、半分くらいは南方で亡くなっています。

佐々江 歴史観というのは一つの課題ですよね。歴史を判断する場合は必ずその人の価値観が入ります。歴史的な出来事は何で起きたのか、何が問題なのか。その人の価値観で、アメリカが陰謀していたとか、挑発受けたとかいう見方も出てきています。全部アメリカが日本を貶（おとし）めてやったんだという価値観からすると、そういう話も出てきます。他方でソ連の陰謀説などについても、歴史的検証が充分あるのかどうか。

荒井 そういう歴史観があることを知ってますよというのが武器になるのだと思います。何も知らないままではなく、主張しないけどそういう説があることを僕も知ってますよ、あなたどう思い

ますと聞いてみたいわけです。

佐々江 アメリカは日本の広島、長崎に原爆を落としました。そのあとアメリカの調査団とかが来て戦後の占領が始まります。アメリカの占領団がいろいろ検証した結果として、アメリカは原爆を落とさないで日本に勝てなかったのかという問題提起もありました。アメリカはほぼ勝っていたにも関わらず原爆を落としたという見方や本もありましたが、しばらくの間占領軍によって発禁でした。アメリカにとって都合が悪いし……。そういう見方をする人もあったということであり、本当にそれがすべてだったのかというのも当然あるわけです。

分断の要因は地域ニュースの不足

八木 対話の重要性というのはあるかと思います。これだけ世の中が分断している状況で、間をとりもつ人がいないようなところで奈良の役割があるのでは。

荒井 分断は最近世界中で見られる現象で、どのように見るかに関心があります。以前にアメリカ・ニュージャーシー州の知事が、ローカル・ニュースが流れないと分断が起きると言っていました。同州でマスコミが流すニュースは、トランプ大統領がくしゃみしたとか、誰の悪口を言ったとか、反発したとかで、それでは結局、判断・意見が分かれてしまうだけですとっておられました。ローカルのことであれはどうだ、これはどうだと言っていると分断が起らない。コミュニティの中での議論になるからということ。同じようなことは、スイスでもローカル・ニュースが流れなくなったから分断化が進んでるといいますし、ヨーロッパでも言っています。**佐々江** ローカルなメディアは経営が難しくなっただけです。つぶれていくのも多いそうですけど。

荒井 そうそう、大変なんです。ローカル新聞も民主主義の安定勢力なのに。最近のポピュリズムと分断の原因の一つとして地方

紙の発行部数が少ないことも挙げられます。民主主義が正常に機能するため、実際に起こっているケースを知って判断してもらおうというのはとても大事なことです。議会の放送や報道があると、市民の方は議員がどんな質問しているのか、首長がどんなに答えるのかとか、よく知っておられると良い判断に繋がると思っています。

八木 インターネットだと見たいもの、聞きたいものだけをピックアップしてしまいます。そういうところが分断を生んでしまっているとも言われます。私もテレビのローカル局にいたことがあり、いまのお話で、改めてローカルのメディアやニュースの役割を確認できたのかなと感じました。

信仰心の篤い企業家ほど奉仕する

荒井 アメリカ大統領選挙ですが、トランプさんが再選するかどうかは経済状況にもよるといふ説もあります。アメリカ経済は好調ですが、なぜ好調なのか。最近出ている説では、アメリカ人は信仰深いからというのがあります。マックス・ウェーバーの資本主義とプロテスタンティズムの倫理を引用して言われている説ですが、信仰深いとなぜ経済が伸びるのか、ということ。ヨーロッパは停滞しているのは信仰から離れてしまったからだとし、日本はもつと離れてしまったから経済が停滞しているという説にもつながってきています。キリスト教で商売を一生懸命やるっていうのは、つまり儲けてもいいよという理屈は、人のために還元するからいいよということ。プロテスタンティズムの倫理で言っているという解釈であり、人のために奉仕のために儲けるなら、もつと儲けなさいと言っています。

信心深くなればなるほど儲けてそれを奉仕に使う。奉仕がトランプ大統領への献金になるかもしれないけど、世の中を良くするため直接に奉仕するのだと。ビル・ゲイツでも当然奉仕に使っている。それでアメリカでは経済が活発になり金持ちも出てくるのだという

のです。ヨーロッパは信仰が薄くなったからそんなに儲けなくてもいいよとなり、また日本も豊かになったから働かなくてもよいよとなってきた。だけど本当は、貧しくても豊かになっても「三方良し」を心がけて世間が良くなるために稼がないといかんよという教え・倫理なのに、それが廃れてきたという説があるのです。そういう説についてはどうですか。

佐々江 アメリカは資本主義のメツカですが、金持ちの流儀というか、成功してお金を儲けた人は社会に還元するという考え方があります。大学の図書館であれ、公共の団体や施設であれ、寄付すれば税が助かるという面もあるわけだけど、それだけじゃない。財を成した人で、あと1、2年で余命がなくなるという人でもいとも簡単に、あるところへ全額を寄付しますとか、そういうことが起きています。普通に考えれば子孫にやったらと思うんですけど、あつさりというのをする人はいます。

荒井 アメリカの金持ちの人には守銭奴という感じがしませんね。執着しないから稼げるという雰囲気が出ているような感じというか。世の中のために使いたいんだというエクスキューズ（弁明）があるのでお金を儲けてもいいんだという経済のメンタルになっているというふうに解釈する本があるものだから、触れてみました。信仰深い方が、資本主義が発展するということでしょうか。

佐々江 しかしそれは、どういう神様を信じているかじゃないですか、ありていに言えば。いろいろありますから。トランプ大統領を圧倒的に熱狂的に支持しているキリスト教の一派（福音派）があります。この人たちがなぜトランプ大統領を熱狂的に支持したかといえば、最大の理由の一つは妊娠中絶の女性の問題でしょう。福音派の人たちはあつてはならないことというふうに思っていて、トランプ大統領はそういう保守的な考え方の支持を受けています。日本社会では今ごろそんなことを言ってるのかという感じもあります。が、アメリカでは脈々としてある。

荒井 保守的な信仰だから商売熱心。今度奈良にJWマリオット

ホテルができます。創業者の故J・Wマリオットさんはモルモン教の信者で、ものすごく信仰熱心な方だったとうかがっています。

佐々江 その話は、実は以前に直接、聞いています。マリオット夫妻は大変助けてくれました。ワシントンでの「桜まつり」などのときに助けてくれ、非常に親切にしてくださいました。ホテルの話も出て、日本はどうなんですかと聞いたら、大いに進出を考えていますと言っておられました。

荒井 信心深い人は奈良でも商売していただけるんだなということですが、この場でマリオットさんの話をうかがえるとは思いませんでした。「仏教のマリオットさん」なら、お布施。お布施というのは、あるものはあげなさい、お金のある人はお金を出しなさい、喜捨（寄付）しなさいと。お金のある人はお金をあげなさい、お金のない人は知恵をあげなさい、お金も知恵もない人は温かい心をあげなさいということですね。

【質疑応答から】

ヒーローがアメリカの分断を救う

質問者 アメリカのナショナリズムの問題は昔からありますが、最近になって分断がクローズアップされてきました。この流れの中でトランプ政権が出てきたのだろうかというのが政治学者の見方ですが、もっとひどくなりそうでしょうか。

佐々江 短中期的に5年とか10年先までは、行き着くところまで行くのでは。アメリカの政治的イデオロギーの分断は激しく、しばらくは保守化していくでしょう。オバマ政権8年間の反動で論争・対立が逆戻りし、いろんな価値観で分断が起きている。アイデンティティーの問題、つまり自分たちは何者であるのかを巡って、もう一度人種的なアイデンティティー、黒人か白人かとかノンホワイトとか白人至上主義といった人種的な単位要素によって、いまいちど

反動が起きています。しばらくは分裂的な価値で経済的、文化的、人種的な抗争が増大してくると思います。そしてアメリカは分裂していくのか。分裂するという人もいるが、アメリカという国はそれでは駄目だろうか、ヒーローが登場してくる可能性がないわけじゃない。アメリカに対する楽観論かもしれませんが、短中期的には分断化が進み得るが、ある一定のところまで行くと統合への力がいずれ湧いてくるんじゃないでしょうか。私は日本を愛していますが、アメリカも愛している。いい国になって引き続き世界をリードしてもらいたいと思っています。アメリカが自分たちの分断の問題でエネルギーを取られるのは残念で、期待の方へ思いを寄せたいですね。

ほどほどに批判されるのが理想的

質問者 大正時代から日米開戦までに駐米大使をされた方が何人もいらっしやいます。その中で、故・斎藤博さん（在任1934～1939年）は日米関係が悪かったとき、アメリカ人にも尊敬されました。佐々江さんが、これまでの駐米大使の経験で参考になったことがありますか。

佐々江 大使の仕事は、内容は何であれつなぐことだと思います。人と人、国と国をつなぐ。戦争は外交の延長・手段という考え方がありますが、戦争に勝つことによって外交に勝つという考え方もあります。日露戦争や日清戦争ですね。現代においては戦争に勝つことによって外交で利益を得るという考え方はなかなか難しくなってきました。どういう利害であろうと出口を見つけ出すことが大事で、自分たちの主張が全部通れば国民はよくやったと喝采しますが、他方で相手の国民はなんだということになるわけですから、ほどほどに批判される、国内からも批判され、相手からも批判されるのが最も理想的な外交の在り方だと思います。世間から評価されようと思う人は外交には向かないですね。

荒井 韓国との仲が悪くなっていますが、韓国のナショナリズム

と思うべきなのか、文大統領の思想の表現、地域の、党派の考え方を言っているだけなのか。佐々江さんのおっしゃるようにお互いのことを思い合えば、国を挙げて対峙することはないんじゃないかな、とも思います。われわれに見る目と聞く耳があればいいのではないですか。